

森雄材先生のご逝去を悼む

森雄材先生が逝かれた。

森先生は、日本に中医学の知識が必要なときに彗星のように登場し、自らの役割が終わったと知るやささと表舞台から退かれた。

その間になされた仕事は、日本の漢方医学、中医学を牽引する重要なものばかりであった。

療原から出版された『中医学基礎』は、森先生が携わった最初の書籍であろう。この本の元本は、中国の中医学院の全国統一教材（第2版）であり、この書の翻訳出版によって日本の若手研究者が続々と中医学の研究に入った。

医歯薬出版から出された『中医学入門』『漢薬の臨床応用』『中医処方解説』は、中医学をなんとか現代医学の方法論で理解しようとする試みに溢れていた。その後、中医学の奥深さを知るや、『中医臨床のための常用漢薬ハンドブック』『中医臨床のための舌診と脈診』『中医臨床のための温病学』『症状による中医診断と治療』『中医臨床備要』『中医臨床のための病機と治法』など、中医学を理解するために極めて重要なテーマについての書物を次々に出版していったばかりか、古典の紹介に関しても意欲的で、楊育周の『傷寒六経病変』、譚目強編著の『金匱要略浅述』『中医臨床のための温病条弁解説』『医学衷中参西録を読む』など、精力的に翻訳出版された。

すでに『漢薬の臨床応用』『中医処方解説』が出版されているにもかかわらず、前著を上回る深い内容の『中医臨床のための中薬学』『中医臨床のための方剤学』を出版されたのは、日本の漢方界にとってかけがいのない幸せであった。この2冊は標準教科書として長く後世に残るであろう。

これらはすべて神戸中医研の仕事であるが、森先生の卓越した中医学理解があって初めてできたことである。これほど高度な内容を、誰もが読んで理解できる平易な日本語で表現し得た人間は、先生をおいてほかになかった。

これらの書物は、日本の漢方医学全般に計り知れない恩恵を与えてくれた。

先生は伊藤良先生とともに、これらの出版活動の合間を縫って、神戸中医研のメンバーたちと中国の老中医を訪ねる旅に出かけられたり、中国から老中医をお呼びして講演会やシンポジウムを開催されたりした。神戸中医研の学問的レベルがそのたびに向上していったのはいうまでもない。

小生が森先生と初めてお会いしたのは、カネボウ薬品が創刊した『THE KAMPO』における第1回座談会であった。当時のカネボウ薬品は医療用漢方製剤を発売開始したばかりで創建の気概に溢れ、この雑誌はそのシンボルとして発刊された。

座談会における先生の軽妙洒落な話術は、高度な中医学の内容をわかりやすく解きほぐし、その内容を誰でもが理解できるレベルにもっていった。この座談会には、伊藤良先生とともに関西の漢方界を牽引しておられた山本巖先生がおられたので、臨床的にも極めて高度な内容が確保され、日本の中医学のレベルが飛躍

的に高まった。すべて森先生の功績である。

小生は、膨大な書物の著者のまじめな顔とは裏腹に、人懐こい笑顔で接する森先生に親近感を抱き、以来、この座談会やシンポジウムや雑誌の発刊を通じて交遊を深めた。彼の黄金時代に一緒に仕事ができたとを幸せに思う。

天は必要なときに必要な人を私たちに下さった。役割を果たした後、彼は自らの存在をさりげなく隠しながら生き、そして逝かれた。

その文章、座談会での発言、仕事が終わってからの会話、いずれも洗練された紳士のそれであった。シャイで、自らを表面に出さず、何食わぬ顔でいつの間にか仕事を終え、ニヤリと笑う笑顔が素敵だった。

この十年ほどお会いしていなかったが、あの頃の森先生を思い出すだけで、当時の和やかな雰囲気が蘇る。

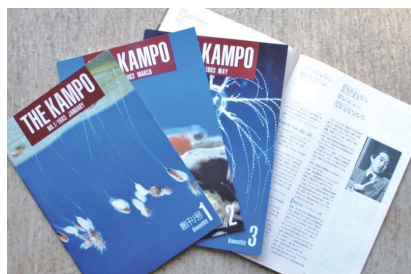
もし森先生がいなかったら、日本の中医学の理解はこれほど進むことはなかったであろう。

今はただ感謝の気持ちだけが浮かぶ。

しばらくその想いに浸っていたいと思う。

森先生の素敵な笑顔を思い浮かべながら……。

安井廣迪（安井医院）



『THE KAMPO』座談会で



第3回日中・中医学研究会記念写真
(前列右から2番目が森先生、左端が筆者)

第3回
日中・中医学研究会報告集

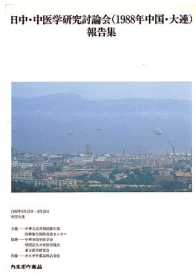
編集 安井廣迪
発行 日中医学協会
発行所 日中医学協会事務局 東京都千代田区千代田7-1-1
TEL 03-5561-1111 FAX 03-5561-1112

内装デザイン

第3回日中・中医学研究会報告集



日中・中医学研究討論会（1988年・大連）の
一場面（右端が森先生）



日中・中医学研究討論会（1988年・大連）報告集



『中医学基礎』(燎原)と『中医学入門』(医歯薬出版)



医歯薬出版から発行した『中医臨床のための病機と治法』『中医臨床のための中薬学』（現在は東洋学術出版社）『中医臨床のための方剂学』『中医臨床のための温病学』



楊育周著，森雄材・安井廣迪共訳『傷寒六経病変』（人民衛生出版社）